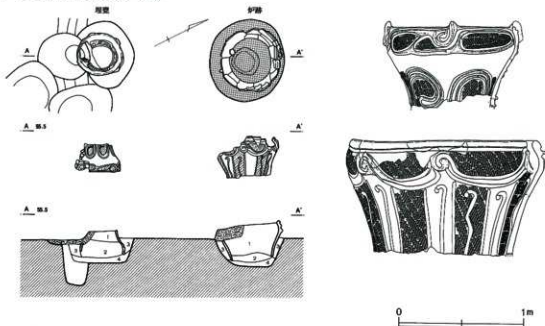


第432図 D区第48住居跡埋壘・炉跡



D区S J 48埋壘

- 1 黒褐色土：ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり良好し
- 2 黒褐色土：ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり良好し
- 3 暗褐色土：ローム粒子多量、炭化物微量含む 粘性あり、締まりあり
- 4 暗褐色土：ロームブロック多量含む 粘性強、締まり良好し

D区S J 48炉跡

- 1 暗褐色土：ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物少量含む 粘性なし
- 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量含む 粘性なし、締まり良好し
- 3 暗褐色土：ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量含む 粘性なし、締まり良好し
- 4 暗褐色土：焼熟ロームブロック・焼土粒子多量含む

は平坦で、炉跡周辺が若干低くなっている。

壁溝は1巡し、重複はみられない。炉跡は主軸線上の若干南西寄りに位置している。直径40cmの不整形の地床炉で、第48号住居跡に伴うピットに南東壁を切られている。深さは15cmを測る。

床面上からは多数のピットが検出されているが、それらの中から本住居跡に属するものを識別するのは困難であり、柱穴配置は不明である。

出土土器（第434図・第436図）

第436図4は吉井城山類の口縁部である。口縁から胴上半部にかけての部分が2つの部分に分かれて出土した。口縁下に2条の沈線が巡り、沈線間に棒状工具先端の円形刺突が巡る。

胴上半部には波状の沈線が巡り、波底部から磨消し懸垂文が垂下する。波状沈線と口縁との間にはわらび手状の沈線が描かれる。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

第434図1は連弧文系の深鉢口縁部であろう。口縁下には棒状工具先端を用いた円形の刺突が2段に巡

る。地文は櫛歯状工具の条線が縦文に施文される。

2も連弧文系の深鉢口縁部であろう。口縁下に2条の沈線が巡り、沈線内部に円形の刺突が施される。

3は外反する深鉢口縁部である。口縁下に1条の扁平な隆帯が巡る。胴部には縦文の微隆起線が垂下し、一側が無文化して磨消し懸垂文を構成する。隆帯及び微隆起線の地文部側には、L R単節縦文回転の縄文が施文される。

4・7は無文の口縁部で、口唇は肥厚しつづつ内湾する。胴部との境には1条の沈線が巡る。浅鉢に属するものであろう。

6・7・9～14は磨消し懸垂文である。7は懸垂文間の地文部に単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。11は地文部にわらび手状の沈線が描かれる。14は微隆起線に左右を区画される磨消し懸垂文である。

15は深鉢胴上半部で、頸部との境を半裁竹管状工具による平行沈線で分帯する。頸部は無文、胴部にはR L単節縦文回転の縄文が施文される。16は深鉢胴部と思われ、櫛歯状工具による波状の条線が垂下する。

17は断面三角形の二本隆帯により渦巻文が描かれる。18・19は無文の胴下半部から底部で、深鉢に付属するものであろう。

第43号住居跡

東半分が調査区域外に存在している。第26・48号住居跡、第31・36号土壌を切っている。

炉跡だけが検出され、これに伴う壁溝・柱穴などは発見されなかった。このため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向などは一切不明である。

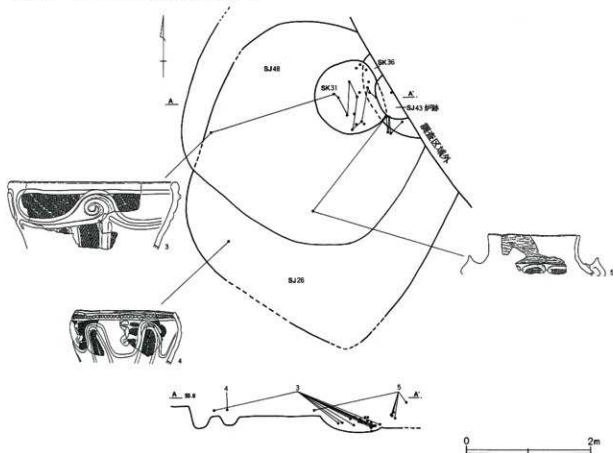
炉跡は第36号土壌の覆土を切って掘り込まれており、楕円形の地床炉であるとみられる。長径76cm、短径は不明である。深さ30cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第48号住居跡

住居跡の北東部分およそ1/3が調査区域外に存在する。第26号住居跡を切っており、第34号住居跡、第36号土壌に切られる。第25号住居跡、第31号土壌とも重

第433図 D区第26・48号住居跡遺物分布図

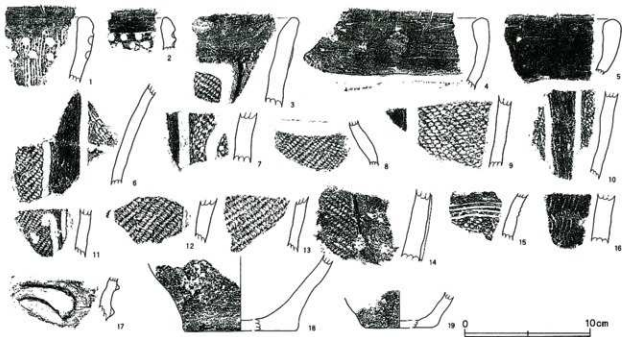


復するが、新旧関係は不明である。

楕円形ないし隅丸長方形の住居跡で、長径は不明、短径は3.9mを測る。主軸方向はN-27°-Eを指す。壁高は残りの良い部分で約10cmで、掘り込みは第26号住居跡よりも2〜3cm浅い。第431図の土層断面上の第2層としたローム混じりの暗褐色土は第26号住居跡床面上を広く覆っており、本住居跡の床面構築土と考えられる。大部分が第26号住居跡と重複しているため、床面の起伏・傾斜などの状態は不明である。壁溝は床面上を1巡し、重複はみられない。

炉跡は主軸線上のやや南西寄りに位置している。埋甕炉で、胴下半部を欠く深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は直径65cm、深さ21cmの円形平底のピットで、底面に著しい焼土の堆積がみられた。炉体土器は下端を焼土層上面に乗せた状態で埋設され、口縁部を床面上に13cmあまり露出していたものと思われる。この焼土層と炉体土器との層位的関係は、本住居跡の

第434図 D区第26号住居跡出土土器



伊跡が、伊体土器埋設以前にも、地床伊など別の形態で機能していた時期があったことをうかがわせるものといえる。

主軸線南西端で、壁溝内側に半ば掛かる位置に埋設が存在する。胴下半部を欠いた深鉢を逆位に埋設したものである。

掘り方は直径54cm、深さ21cmの不整円形で平底のビットである。土器は掘り方底面から約5cm浮いた状態で埋設され、床面上に6cmあまり露出していたものと思われる。

伊跡と埋襲の間隔は、床面上に露出した部分では約8cm離れている。埋襲の両側には1対のビットが検出された。

床面上からは多数のビットが検出されたが、本住居跡に伴う柱穴を特定することは困難である。部分的な調査でもあり、本住居跡の柱穴配置は不明である。

前述の伊体土器・埋襲のほかに、覆土中から縄文時代中期末葉の土器が出土している。

出土土器（第435図・第436図）

1は伊体土器である。キャリアー類の深鉢で、胴下

半部と口縁の一部を欠失する。口縁下に1条の沈線が巡る。

口縁部文様帯は二本沈線による繫弧状のモチーフが描かれ、繫弧の接点には隆帯渦巻文が配される。

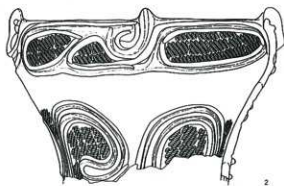
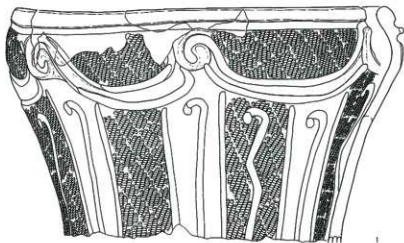
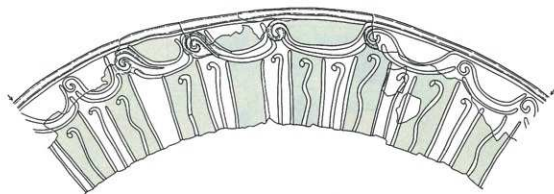
胴部には磨消し懸垂文が垂下するが、その配置は必ずしも口縁部文様帯のレイアウトに呼応したものではない。

懸垂文に平行してわらび手状の沈線が垂下するが、その配置は不規則で、場所により地文部・無文部双方に描かれる。地文はRL単節の縄文である。口縁部・胴部の別なく右下がりに回転施文され、結果として縄文の条がすべて垂直方向に揃っている。

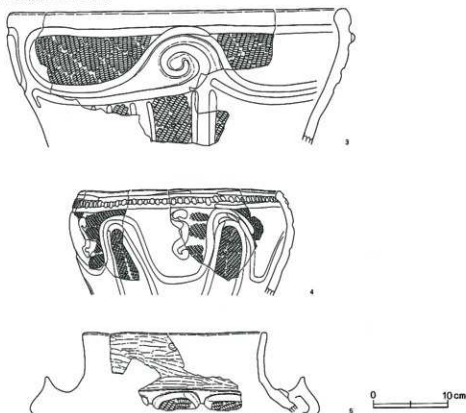
口径48.5cm、現存高31cmを測る。

2は埋襲である。キャリアー類深鉢で、胴下半部を欠失する。口縁部文様帯は隆帯+沈線により楕円形の区画が描かれる。区画内部にはRL単節の縄文が横位回転で施文される。楕円区画の接点に隆帯渦巻文が配されるが、渦巻の一端が口端上に突出してひれ状の突起を形成している。

第435图 D区第48号住居跡出土土器(1)



第436図 D区第48号住居跡出土土器(2)



頸部には無文帯が存在する。口縁部文様帯との境は隆帯や沈線によって明確に分離されるが、胴部文様帯との境には特に区画は設けられておらず、縄文部と地文部の境も不整である。

胴部には沈線のなぞりを伴う2本一組の隆帯によってわらび手状の渦巻文が描かれる。モチーフの間隙にはRL単節の縄文が充填施文される。

口径32cm、現存高22.4cmを測る。

3は破片の大半が第31号土壌覆土から出土しており、同土壌に伴う遺物である可能性が高い。ただし、口縁部文様帯における渦巻文の扱いなどが1の個体と非常に類似しており、きわめて近い時期の遺物であるものと思われる。

キャリバー類の深鉢で、口縁から胴上半部にかけて残存する。口縁下に1条の沈線が巡る。口縁部文様帯は隆帯+沈線によって渦巻文と楕円形の区画が交互に

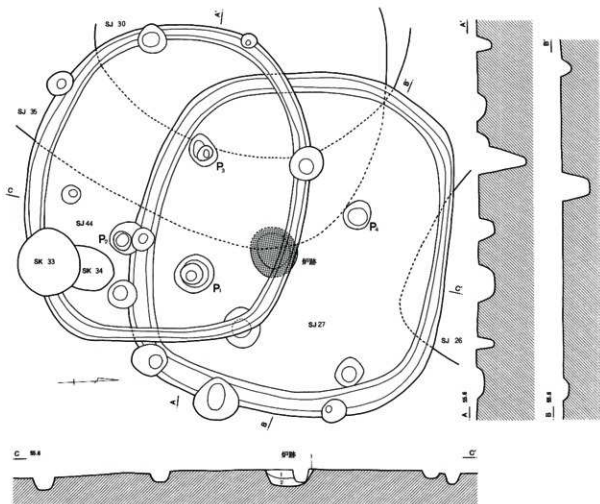
描かれる。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、口縁部では右下がりに、胴部では縦位回転で施文される。

5は両耳壺である。口縁部から胴上半部にかけて残存する。口縁は無文で、横位から斜位の研磨が施される。頸部は垂直に近い角度で立ち上がり、口端は軽微に外反する。肩部には1条の隆帯が巡って段を形成し、胴部との境を区画する。

胴上半部にはキャリバー類の口縁部由来する文様帯を持つ。隆帯+沈線によって渦巻文と楕円形の区画を描くもので、地文はRL単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

胴上半部の隆帯渦巻文の直上にあたる口縁直下に、指頭または棒状工具先端を用いた1点の盲孔が施される。渦巻文と呼応して、器の正面を表示するものと考えられる。

第437図 D区第27・44号住居跡



D区S.J.27が跡

- 1 暗褐色土：焼土ブロックや多く、炭化物若干含む 粘性欠き、締まりよし
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む 粘性欠き、締まりよし

D区第27・44号住居跡（第437図）

F-17区に所在する。2軒が切りあった状態で検出され、第44号住居跡の壁溝が第27号住居跡の炉跡を切ることから、前者が後者より新しいものとみられる。

第27号住居跡

第35・44号住居跡に切られる。第26・30号住居跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

楕円形の住居跡で、長径5.5m、短径5mを測る。主軸方向はN-76°-Wを指す。

壁は全く残存しない。壁溝は1巡し、重複はみられない。

炉跡は主軸線上やや南東寄りに位置している。円形

の地床炉であるが、西半を第35号住居跡の壁溝に破壊されている。直径74cm、深さ25cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

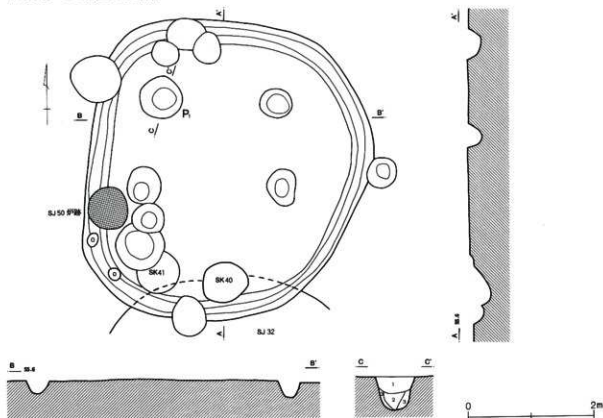
第44号住居跡

第27号住居跡を切っている。第26・30・35号住居跡、第33・34号土塊とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

楕円形の住居跡で、長径5m、短径4.45mを測る。主軸方向はN-88°-Wを指す。壁は全く残存しない。壁溝は1巡し、重複はみられない。炉跡は検出されなかった。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第438図 D区第29号住居跡



D区SJ 29

- 1 暗褐色土 : ローム粒子・ロームブロック少量含む 粘性あり、締まりあり
- 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子少量、炭化物微量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック、ローム粒子多量含む粘性に富み、締まりあり

D区第29号住居跡 (第438図～第441図)

E・F-17・18区に所在する。第50号住居跡に切られており、また第32号住居跡、第40A号土塼とも重複するが、新旧関係は不明である。北に向かって開く隅丸台形の住居跡で、長径47.5m、短径4.3mを測る。主軸方向はN-11°-Eを指す。壁はまったく残存しない。壁溝は1巡する。伊跡は検出できなかった。

住居跡北東コーナー付近の壁溝内側で、2点の復元個体を含む土器片が集積する遺物集中地点が確認された。土器片は遺構検出面から2～4cm浮いた状態で面的に出土し、うち数点は壁溝埋土内部に落ち込んだ状態であった。

これが住居跡床面ないし覆土中における出土状態を示すものであるとするなら、本住居跡の伊跡が検出されなかった事実との間で辻褄があわなくなる恐れがあ

る。伊跡が完全に失われるほどに遺構上面が削平されているならば、当然住居跡の床面は遺構検出面よりも上に存在したはずであり、覆土中や床面上の遺物も失われていなくてはならないからである。

伊跡が検出されなかった原因には、削平のほかにも、耕作などによる攪乱、焼土の堆積が不十分であったための見落としなどが考えられる。前述したような壁溝との位置的・層位的関係を重視するならば、この遺物集中区を本住居跡と無関係のものとするのには無理があるだろう。したがって、ここでは遺物集中地点から出土した土器は基本的に第29号住居跡に伴うものとして取り扱うこととした。

遺物集中区からは2点の復元個体以外にも若干の土器片を出土している。いずれも縄文時代中期後葉から末葉に属するものである。

出土土器 (第440図・第441図)

1は磨消し連弧文の深鉢である。胴下半部と、口縁の一部を欠失する。水平口縁で、胴下半部から中段にかけて垂直に近い角度で立ち上がり、胴上半部はハの字に開いて、口縁部は肥厚しつつ内湾する。

口縁下に1条の沈線が巡り、沈線からは無文化する。胴部中段には平行沈線が巡り、沈線間には円形の刺突列が巡る。文様はこの区画線を境に上下に分帯される。

胴上半部には二本沈線の波状モチーフが巡り、沈線間の地文が磨消される。胴下半部には逆U字状の磨消しモチーフとわらび手状の沈線が交互に描かれる。地文はLR単節の縄文で、胴下半部では縦位回転、胴上半部ではモチーフに沿って充填施文される。口径22cm、現存高17.2cmを測る。

2は深鉢底部から胴下半部である。底面はわずかに上げ底状を呈し、底部周辺には横位の削り調整が施される。地文は櫛歯状工具による縦位の条線が施され

る。地文の上から篋状工具による縦位の撫で調整が間隔をおいて施され、磨消し懸垂文風の意匠を描いている。沈線等による区画は特に施されない。

底径6.8cm、現存高7.8cmを測る。

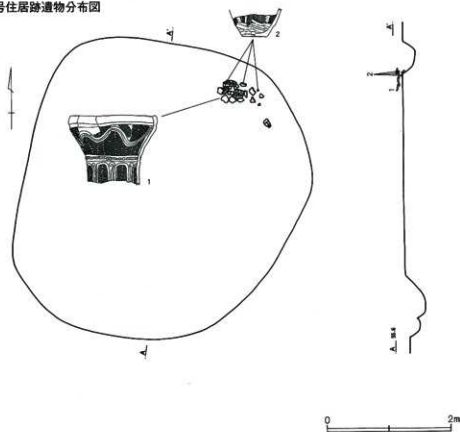
3～5・8はキャリパー類深鉢の口縁部である。3・4は水平口縁、5・8は波状口縁である。5は波頂部に山形の突起が付され、ここに渦巻文が描かれる。8は胴部に幅広い磨消し懸垂文が垂下する。地文はLR単節の縄文である。

6・7は水平口縁の深鉢である。6は口縁下に1条の沈線が巡る。7は口端部が軽微に外屈し、口縁下に断面三角形の隆帯が巡る。

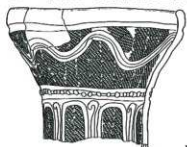
9・10はキャリパー類の頸部で、8の口縁部と同一個体の可能性がある。口縁部文様帯の下端は隆帯によって明確に区画され、胴部に磨消し懸垂文が垂下する。地文はLR単節の縄文である。

11・12は磨消し懸垂文の胴部である。地文はいずれもLR単節縦位回転の縄文である。

第439図 D区第29号住居跡遺物分布図



第440図 D区第29号住居跡出土土器(1)



0 10cm

13は深鉢の頸部無文帯である。胴部との境は1条の沈線で区画され、無文部には斜位から横位の研磨調整が施される。15も頸部無文帯である。胴部との境を平行沈線で区画し、沈線間には円形の刺突列が巡る。

14は磨消し連弧文で、文様構成上は1の個体に類似するが、明らかに別個体に属するものである。

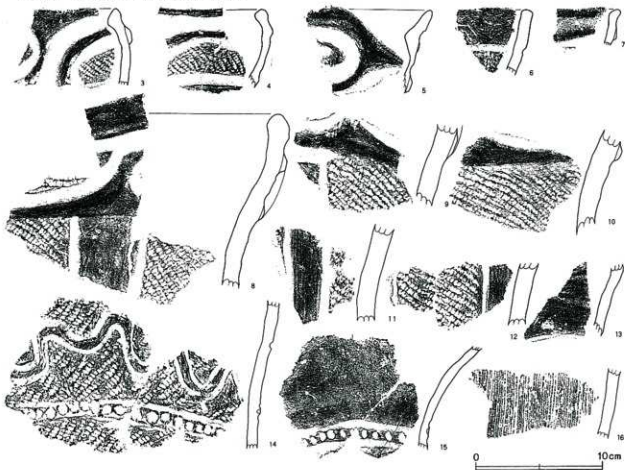
胴中段に棒状工具による平行沈線が巡り、沈線間同一工具先端の円形刺突が施される。胴上半部には

二本沈線による波状のモチーフが描かれる。沈線間の地文は磨消される。胴下半部には文様は描かれず、地文のみ施文される。

地文はRL単節縦位回転の縄文である。1の復元個体に比べると粗雑な文様描線で、器形のうえでも変化に乏しい。

16は櫛歯状工具の条線が縦位に施文される胴部破片である。

第441図 D区第29号住居跡出土土器(2)



D区第30・35号住居跡 (第442図)

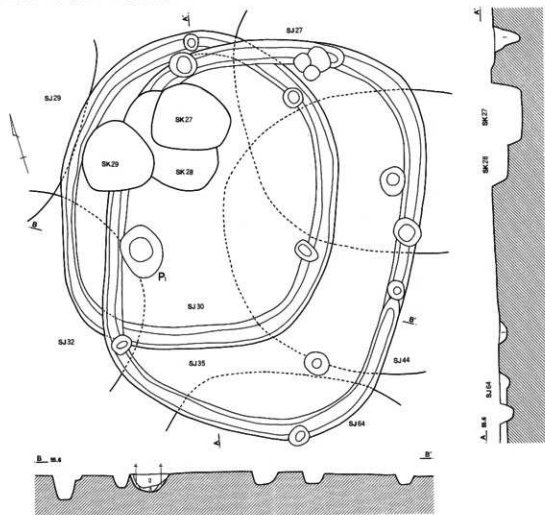
F-17区に所在する。2軒が重複した状態で検出されたが、新旧関係は不明である。

第30号住居跡

第27・29・32・35・44号住居跡、第27～29号土壇等と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形の住居跡で、長径5m、短径4.4mを測る。主軸方向はN-15°-Eを指す。壁は全く残存しない。

壁溝は1巡し、重複はみられない。伊跡は検出されなかった。

第442図 D区第30・35号住居跡



D区S.J. 30・35

- 1 褐色土 : ローム粒子多く含む 締まり弱
- 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まり良し
- 3 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まり良し
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まり良し

0 2m

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

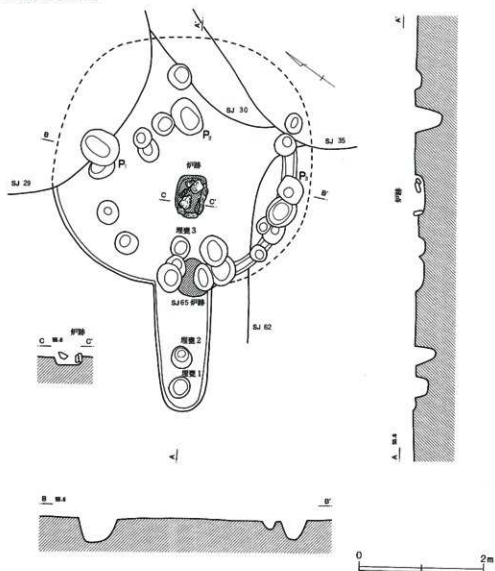
第35号住居跡

第27・32・35・44・64号住居跡、第27～29号土壇等と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形の住居跡で、長径6.2m、短径4.8mを測る。主軸方向はN-28°-Eを指す。壁は全く残存しない。

壁溝は1巡し、重複はみられない。伊跡は検出されなかった。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第443図 D区第32号住居跡



D区第32号住居跡 (第443図～第447図)

E・F-17区に所在する。第62・65号住居跡を切っており、第29・30・35号住居跡等とも重複するが、新旧関係は不明である。

柄杓形の住居跡である。張り出し部と主体部の北西側、全体の1/4弱の部分で5cm程度の立ち上がりを検出したが、それ以外の部分の立ち上がりは他の遺構との切り合いによって検出不可能となっている。

炉跡中心部から張り出し部先端までの距離が約3.5m、これを主体部の直径に等しいものと仮定した場合、張り出し部先端から奥壁までの距離は約5.2mとなる。炉跡を中心とした直径3.5mの円は残存する北西壁よ

りもかなり内側を通るが、後述する壁柱穴のすぐ外側を竪穴住居本来の壁と考えれば妥当な数字といえる。

炉跡は長方形の石囲炉で、検出した時点で北東と南西の2辺の炉石が倒壊していた。板状の礫を組み合わせたものだが、板状節理の片岩系のもの以外に花崗岩や堆積岩系のものも用いられている。長径67cm、短径49cm、深さ13cmを測る。

本住居跡からは3基の埋壑を検出した。張り出し部先端に2基、主体部との連結部分やや内側に1基である。これらを張り出し部先端から炉跡に向かって埋壑1・埋壑2・埋壑3とそれぞれ命名した。炉跡と埋壑を結ぶ線を住居主軸と考えた場合、本住居跡の主軸方

向はN-59°-Eを指す。

埋甕1は胴上半部を欠いた両耳壺を正位に埋設したものである。直径33cm、深さ17cmのビットで、土器は掘り方底面から13cmあまり浮いた状態で埋設され、床面上に半は露出した状態であった。

埋甕2は底部を欠いた深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は直径32cm、深さ32cmのビットである。土器は口縁を伊跡方向に大きく傾け、下端をビットの壁にもたせ掛けた状態で埋設されている。土器の口縁を囲むようにして4点の礫が配されていた。

埋甕3は深鉢胴下半部を正位に埋設したものである。掘り方は直径31cm、深さ8cmのビットで、出入口口部の対ビットの一方を切って掘り込まれており、住

居の主軸線から北西にずれて設定されている。土器は下部を掘り方底面に着けた状態で埋設されている。

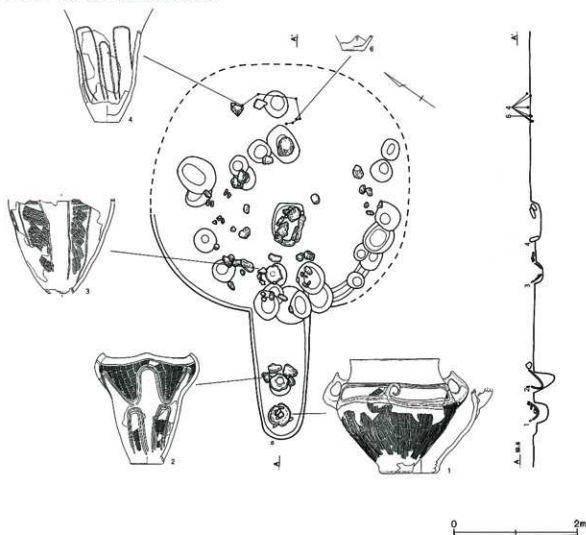
柱穴は壁柱穴で、床面上を環状に巡っている。柱穴列外周の直径は先に述べたとおり約3.5mを測る。

本住居跡も他の杵鏡形住居跡同様に周礫帯を伴っている。環状の柱穴列の内側に径5~20cm大の礫が散漫に検出されたもので、礫はやはりローム面から数cm浮いている。礫に混じって復元個体を含む土器・石器類が出土している。土器の所属時期は縄文時代中期末葉である。

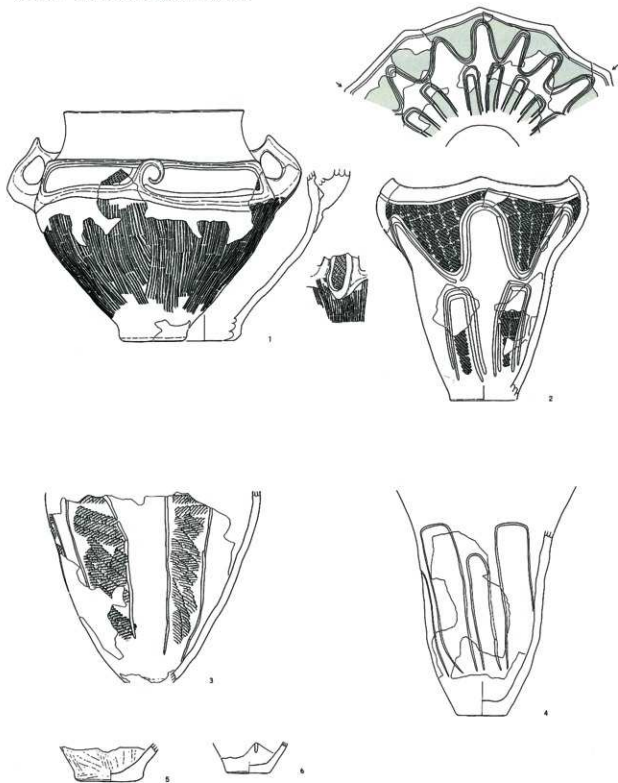
出土土器 (第444図~第447図)

1は埋甕1である。両耳壺で、底部から胴上半部にかけて残存し、胴上半部の区画文と橋梁状の把手の一

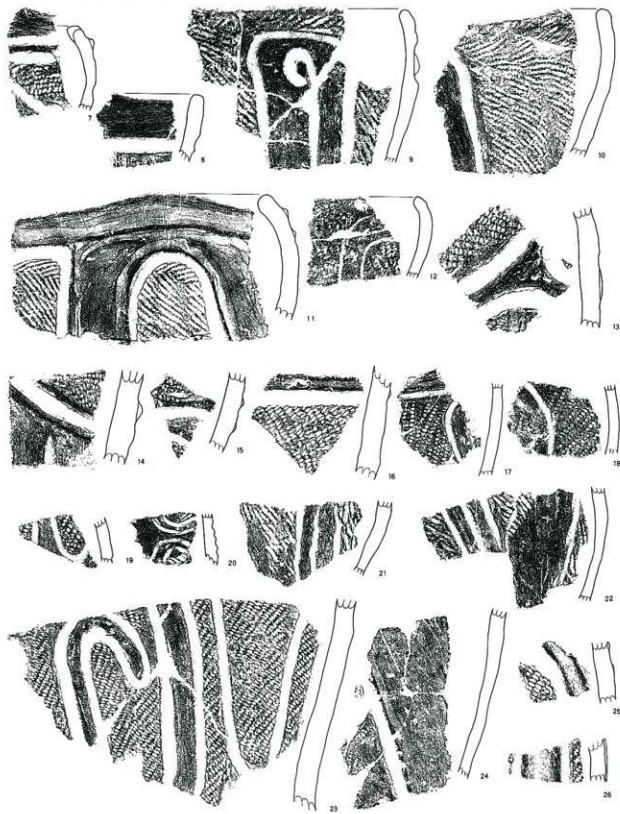
第444図 D区第32号住居跡遺物分布図



第445图 D区第32号住居跡出土土器(1)

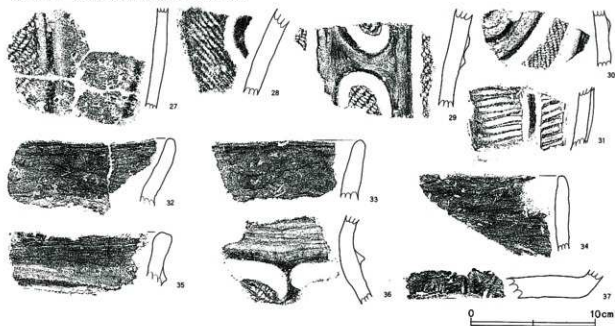


第446图 D区第32号住居跡出土土器(2)



0 10cm

第447図 D区第32号住居跡出土土器(3)



部が確認できる。区画文内部にはRL単節横位回転の縄文が施文され、文様帯正面には隆帯渦巻文が描かれるものと思われる。把手背面には楕円形の沈線区画が描かれ、内部にやはりRLの縄文が施文される。胴下半部の地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

底径約15cm、復元最大径約33cm、現存高23cmを測る。

2は埋甕2である。波状口縁の深鉢で、底部及び口縁の一部を欠失する。口縁下に1条の沈線が巡る。胴上半部には平行沈線の波状モチーフが描かれ、胴下半部には平行沈線による逆U字の磨消しモチーフが描かれる。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

口径24cm、現存高29.6cmを測る。

3は埋甕3である。2に類似の深鉢胴下半部であるが、胴部中段のくびれはさらに上方にも存在するものとみられ、かなり大型の深鉢である。短沈線による逆U字状の磨消しモチーフが描かれ、地文はL無節の縄文で、胴部中段では横位回転、胴下半部では右下がりに回転施文される。

復元最大径28.4cm、現存高25.2cmを測る。

4は奥壁部分の周縁帯から破片の状態で出土した深鉢胴下半部である。底部から胴部中段にかけて断片的に復元された。胴下半部がほとんど張り出さないス

マートな器形で、沈線のみによるH字の懸垂文が描かれ、地文はみられない。

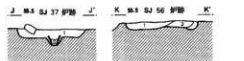
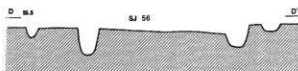
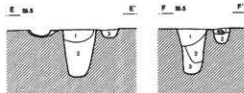
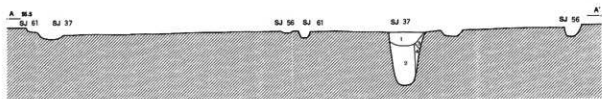
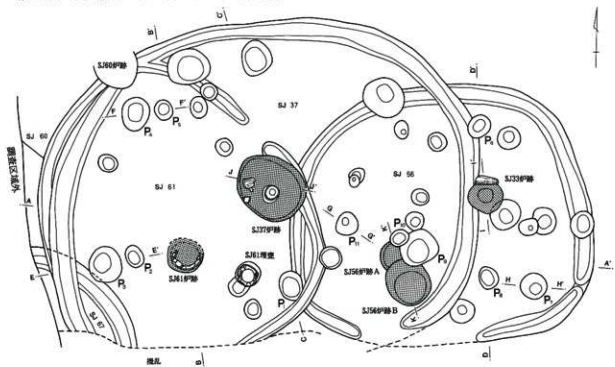
底径6.3cm、現存高24.1cmを測る。

5は深鉢底部である。無文で、全体に縦位から斜位の研磨が徹底される。底径8.8cmを測る。6も深鉢底部である。懸垂文末端と思われる沈線が垂下する。地文はみられない。底径5.4cmを測る。

7~12は深鉢口縁部である。7は波状口縁のキャリバー類深鉢で、沈線による楕円形の区画が描かれる。9・10は逆U字の磨消しモチーフが描かれる。11・12は玉抱き文であろう。13~16はキャリバー類の口縁部文様帯で、胴部との境界部分である。14は磨消し懸垂文が垂下する。17・18は深鉢胴上半部で、逆U字モチーフの一部であろう。

23はアルファベット文が描かれる。25~27、29、30は微隆起線による磨消しモチーフが描かれるものである。31は縦位の隆帯が垂下し、間に横位の集合沈線が充填される。32~35は無文の口縁部である。32は浅鉢、33・34は両耳壺、35は口縁下に断面三角形の隆帯が巡るもので、深鉢の口縁部であろう。36は両耳壺の肩部、37は無文の底部である。

第448図 D区第33・37・56・61・67号住居跡



D区 SJ 37・56・61

- 1 黒褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量、炭化物少量含む
- 2 黒褐色土 : ロームブロック・炭化物少量、ローム粒子やや多く含む
- 3 暗褐色土 : ローム粒子多量、ローム粒子若干含む
- 4 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量、炭化物少量含む

D区 SJ 33 伊跡

- 1 暗赤褐色土 : 焼土ブロック少量、焼土粒子やや多く含む 粘性欠き、締まり無し

D区 SJ 37 伊跡

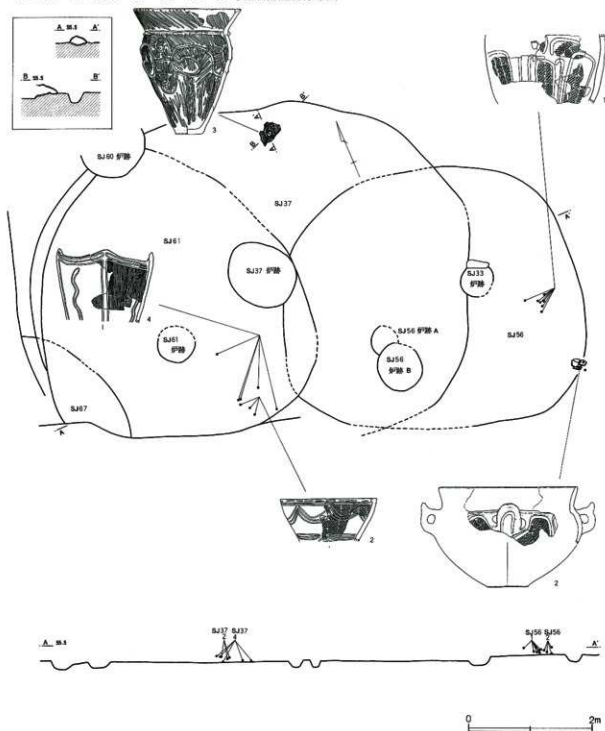
- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、ロームブロック微量含む 粘性強、締まり強
- 2 黒褐色土 : ローム粒子多く、焼土ブロック少量、焼土粒子1層に比し多く含む

D区 SJ 56 伊跡

- 1 暗赤褐色土 : 焼土粒子多量、ローム粒子多量、炭化物少量含む 堅く締まっている
- 2 赤褐色土 : 焼土ブロック・焼土粒子多量、炭化物少量含む



第449図 D区第33・37・56・61・67号住居跡遺物分布図



D区第33・37・56・61・67号住居跡（第448図～第457図）

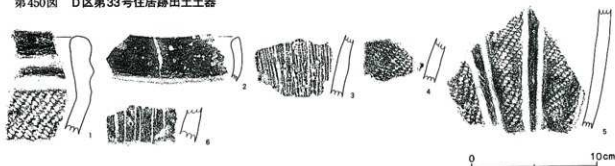
C・D-17・18区に所在する。5軒が切り合った状態で検出された。新旧関係は第57号→第37号→第61号の順に新しくなるものと思われる。第33号住居跡は第56号住居跡の覆土中に伊跡を検出したものであり、第

61号と並んで5軒中最も新しい住居跡の可能性が高い。第67号住居跡については壁溝の一部を検出したのみで、他の住居跡との新旧関係は不明である。

D区第33号住居跡

第56・37号住居跡を切っている。第56号住居跡覆土中で伊跡を検出したもので、伊跡の検出面と第56号住

第450図 D区第33号住居跡出土土器



居跡床面との比高差は12cmを測る。周囲に堅緻な床面は検出されなかった。

壁は残存せず、壁溝・柱穴なども検出できなかった。したがって本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は一切不明である。

炉跡は円形の地床炉で、直径54cm、検出面からの深さ30cmを測る。北壁に1点のみ伊石を伴っている。長径40cmの長楕円形の河原石を、小口を東西に向けて埋設したものである。

伊石の下端は第56号住居跡の床面まで到達してはおらず、伊石の掘り方の有無は不明である。同時に、この炉跡が他に石材を伴っていたかも不明である。

炉跡上面および覆土中から縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。

出土土器（第450図）

1はキャリバー類深鉢の口縁部である。両側に沈線のなぞりを伴う隆帯によって文様が描かれる。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

2は浅鉢の口縁部と思われるものである。口縁内湾し、口縁下に1条の沈線が巡る。3は歯齒状工具による縦位の条線が施文される胴部である。

4・5は磨消し懸垂文の胴部である。地文はRL単節縦位回転の縄文である。6は半截竹管状工具による縦位の条線が施文される胴部である。

D区第37号住居跡

南西壁がガス管等埋設の攪乱により破壊されている。第56号住居跡を切っており、第33・60・61号住居跡に切られる。第67号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

長楕円形の住居跡で、長径7m、短径は約5.6mを測るものと思われる。主軸方向はN-79°-Wを指す。壁高は残りの良い部分で12cmを測る。

壁溝は基本的に1巡するが、床面上に西側のカーブを共有する不整形の壁溝を検出した。当初これを第61号住居跡に伴う壁溝と考えたが、伊跡・埋甕との位置関係がやや不自然である。また、後述するように第61号住居跡は第37号住居跡覆土中に構築された住居跡であると考えられ、その生活面は現ローム面よりもある程度上に存在した可能性が高い。

最終的に、この内外2周の壁溝を第37号住居跡の拡張か、あるいは第61号住居跡とは別個の切り合いに起因するものと判断した。

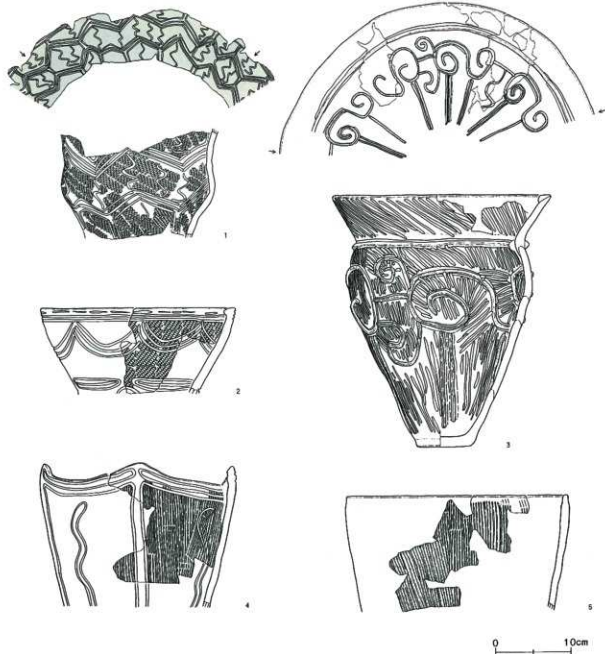
内周の壁溝は直径4.5mの不整形形である。北東壁の一部が切れるほかは1巡し、南西部分を外周の壁溝と共有している。伊跡が内周の壁溝を切って構築されているため、外周の壁溝が内周のものより新しいのは間違いない。

伊跡は住居跡中央に位置している。深鉢胴部を正位に埋設した埋甕炉である。伊跡は長径1.15m、短径93cmの大規模な堀込みを持つ。伊体土器は伊床面の中央に直径20cmほどの小ピットを穿って埋設されており、土器の上端は伊床面から2～3cm露出している。

焼土は伊体土器上面を覆って厚く堆積しており、また伊跡全体の規模に比較して埋設される土器のサイズが不釣り合いに小さいのは明かである。

A区第46号住居跡の項でも触れたが、この種の埋設土器は燃焼主体部を囲う壁体としての伊体土器とは明らかに異なる機能を持つものと考えられ、むしろ煮沸

第451図 D区第37号住居跡出土土器(1)



具の下端を支持する支脚と考えるのが自然であろう。

床面上から十数本のピットが検出されたが、大多数は第60・61号等、別の遺構との切り合いによるものと考えられる。それらの中で、P3・4・9等、深さ70～80cmの大規模なピットが壁溝に沿って並んでおり、これが本住居跡の支柱穴を構成するものとみられる。

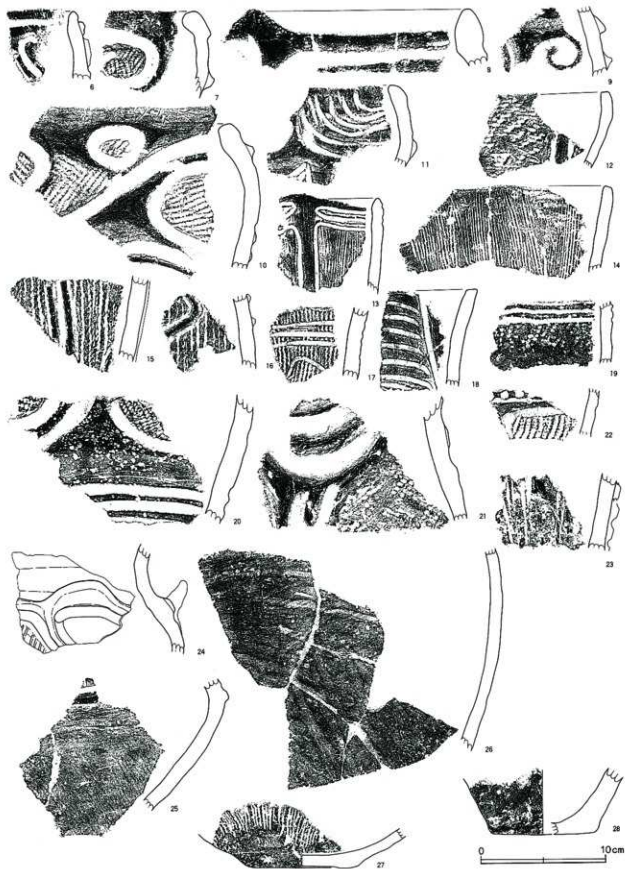
前述の伊体土器のほかに、覆土中から縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。第60・61号住居

跡等覆土中に存在する他の遺構の遺物が相当数混入しているものと考えられる。

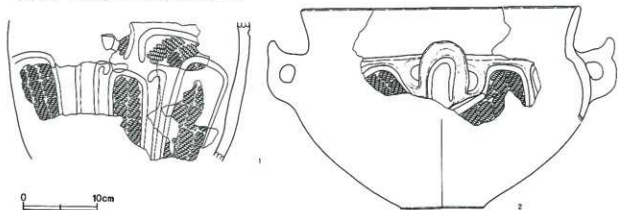
出土土器(第451図・第452図)

1は伊体土器である。連弧文系の土器で、胴下半部がソロバン玉状に張り出す特異な器形である。三本沈線による鋸歯状のモチーフが2段構成で描かれる。口縁部との境は横位の平行沈線によって区画され、胴下半部の鋸歯状モチーフは二本沈線の懸垂文と接続して

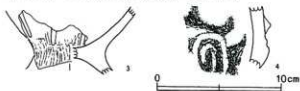
第452图 D区第37号住居跡出土土器(2)



第453図 D区第56号住居跡出土土器(1)



第454図 D区第56号住居跡出土土器(2)



いる。上下のモチーフおよび口縁部区画との間には、縦位の蛇行沈線によって相互に連結される。地文はRL単節の縄文で、右下がりには施文される。沈線間の地文の磨消しなどは行われていない。復元最大径20.2cm、現存高13.9cmを測る。

2は連弧文系の土器である。水平口縁で、口唇内側に1条の隆帯が巡って、稜を形成する。口縁下に三本沈線がめぐり、この部分の地文は磨消される。

胴部中段に巡る三本沈線の区画は数カ所に切れ目を生じ、上下の沈線が連絡して、横楕円形のモチーフへと変化している。胴上半部には三本沈線の連弧文が描かれる。胴下半部には逆U字状の沈線文が描かれる。

3は唐草文系の深鉢である。床面上で横位につぶれた状態で出土したもので、口縁の一部が欠失する。水平口縁で、内面に1条の隆帯が巡って稜を形成する。頸部にくの字のくびれを持ち、ここに1条の隆帯が巡って口縁部と胴部の文様帯を区画する。

胴部には単独の隆帯による横S字の主文様が描かれる。モチーフの末端や接点にはわらび手やJ字の副文様が付けられ、胴下半部には隆帯懸垂文が垂下する。

地文は棒状工具による集合沈線で、口縁部では斜位

に、胴上半部ではモチーフに沿って充填施文され、胴下半部では懸垂文に沿って、縦位に垂下する。口径28cm、底径6.8cm、器高33.2cmを測る。

4も床面出土で、波状口縁の深鉢である。口縁直下に横楕円形の区画が描かれ、波頂部直下で切れ目を生じる。ここから胴部に磨消し懸垂文が垂下し、左右に方形の沈線区画を構成する。区画内には縦位の条線上に、わらび手状の平行沈線文が描かれる。

5は水平口縁の深鉢である。全面に櫛歯状工具による縦位の条線だけが施文される。

6~10はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。11もキャリバー類の口縁部であるが、隆帯渦巻文の左右に棒状工具による沈線の重弧文が描かれ、胴部との境を1条の隆帯によって区画する。

12は水平口縁の深鉢である。口縁直下から幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。13は4と同一個体であろう。14は櫛歯状工具の条線だけが施文される口縁部である。15・16は隆帯懸垂文の胴部である。

17は三本沈線の区画が巡り、上下に波状の沈線が描かれる。18は樹枝状のモチーフが描かれる口縁部である。21は二本隆帯で渦巻文と懸垂文が描かれる胴下半部である。23は曾利系の隆帯文土器であろう。24は両耳壺の肩部である。25は胴上半部に文様帯を有する浅鉢である。

D区第56号住居跡

南端の一部をガス管等埋設に伴う攪乱で破壊されて

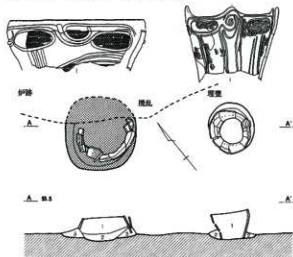
いる。第33・37号住居跡に切られる。不整楕円形の住居跡で、長径4.85m、短径4.05mを測る。主軸方向はN-78°-Wを指す。壁はほとんど残存しない。壁溝は1巡し、重複はみられない。

伊跡は床面中央から南西方向にかなりずれた地点に位置している。2基が重複して検出されており、いずれも不整形の地床伊である。北側のものを伊跡A、南のものを伊跡Bと命名した。新旧関係は、後者が前者を切っている。伊跡の位置としては不自然であるが、一応伊跡Aが住居跡主軸線上のやや南西寄りに設定されているものと考えた。

床面上から多数のビットが検出されているが、第33・37号住居跡等複数の遺構との切り合いにより、本住居跡に伴う柱穴の特定はきわめて困難である。P6~8・11等が壁溝に沿って巡るものとみられるが、全体の柱穴配置は不明である。

出土土器 (第453図・第454図)

1は胴部中段のくびれをほとんど持たない寸胴の深第455図 D区第61号住居跡埋壁



DKS J 61 埋壙

- 1 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 粘性弱・締まり強
 - 2 黒褐色土 : ローム粒子多量・炭化物微量含む 粘性弱・締まり強
- DKS J 61 伊跡
- 1 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量・炭化物微量含む 粘性弱・締まり強
 - 2 黒褐色土 : ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多量含む 粘性弱・締まり強
 - 3 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 粘性弱・締まり強



鉢に、キャリバー類深鉢の文様がやや強引にあらはめたものである。口縁部と胴下半部を欠失する。胴上半部には磨消し縄文による横楕円形の区画やアルファベット文が描かれ、胴部中段以下には逆U字状の区画とわらび手状の沈線が交互に垂下するものと思われる。地文はRL単節の縄文が充填施文される。

2は両耳壺で、口縁部から胴部中段にかけて残存する。口縁部は無文で、胴上半部に隆帯+沈線の区画文が描かれる。肩部に橋梁状の把手が付され、把手背面に逆U字の沈線が描かれる。

3は台付深鉢で、胴部と脚台部の接合部分である。

D区第61号住居跡

第37号住居跡を切っている。同住居跡覆土中に伊跡と埋壙だけを検出した。伊跡は深鉢胴上半部を逆位に埋設した埋壙伊とみられるが、北東部分を攪乱により破壊されている。掘り方は直径60cmの隅丸方形のビットで、第37号住居跡の床面を4cm程度掘り抜いている。土器上端部のレベルは伊床面上約19cmで、本住居跡の床面はこのレベルにあったものとみられる。

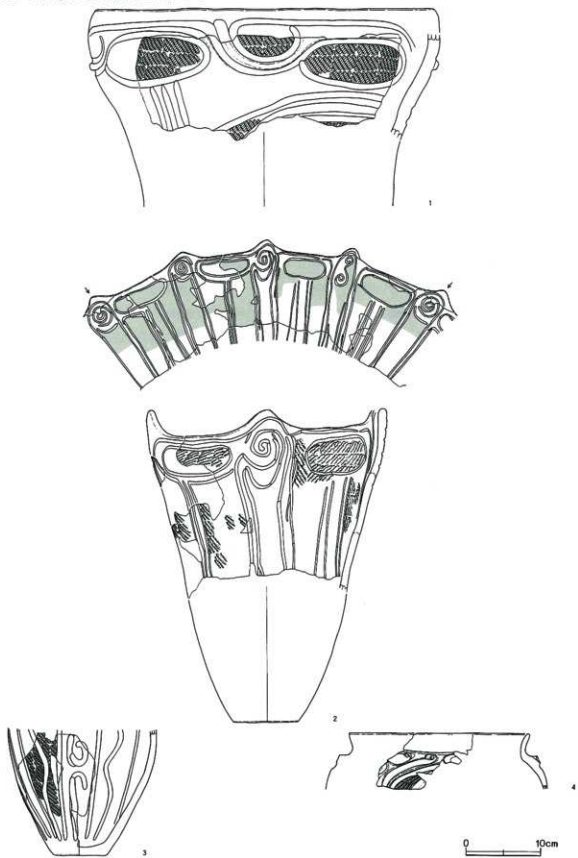
埋壙は胴下半部を欠く深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は直径38cmの不整形のビットで、第37号住居跡床面を2~3cm掘り抜いている。土器は下端部を掘り方底面に接して埋設されている。

出土土器 (第456図・第457図)

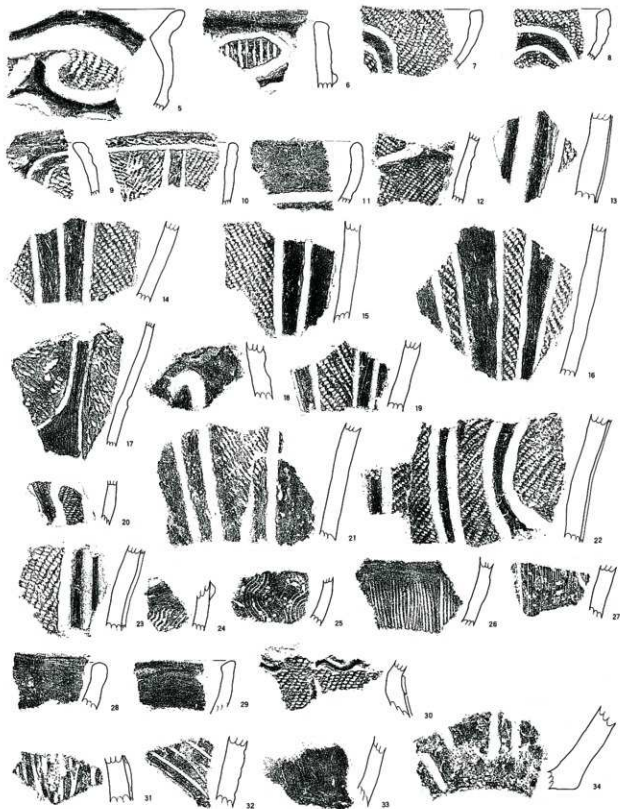
1は伊体土器である。キャリバー類深鉢の胴上半部であるが破壊が激しく、かろうじて全周の1/4程度が復元し得た。口縁部文様帯は隆帯渦巻文を中心に幅広い沈線によって横楕円形の区画が描かれる。頸部には無文帯が存在し、胴部には隆帯+沈線によって唐草文系の文様が展開するものと思われる。地文はRL単節の縄文である。

2は曾利系の深鉢で、胴下半部を欠失する。4単位 of 山形波状口縁をなす。胴部から波状口縁の波頂部直下へと平行沈線による逆U字の区画が貫入し、上端に渦巻文が描かれる。渦巻文の左右には横楕円形の区画が描かれ、形動的な口縁部文様帯を構成している。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はL単節の縄文

第456图 D区第61号住居跡出土土器(1)

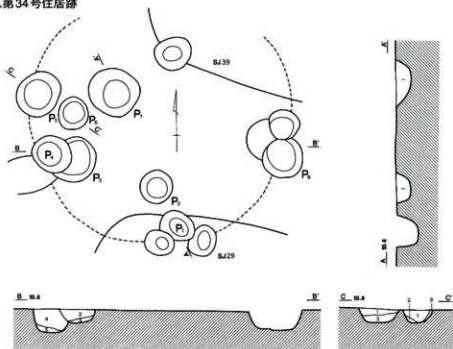


第457图 D区第61号住居跡出土土器(2)



0 10cm

第458図 D区第34号住居跡



D区S.J.34

- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子微量含む 粘性なし、締まりあり
- 2 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量含む粘性あり、締まりあり
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりあり

- 4 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む含む 粘性あり、締まりなし
- 5 暗黄褐色土 : ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりなし

0 2m

で、口縁部以外では比較的疎らに施文される。口径30.2cm、現存高24cmを測る。

3は深鉢胴下半部である。磨消し懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文が交互に垂下する。磨消し懸垂文内部にはわらび手状の沈線が描き込まれる。

4は有孔罍付土器である。両側に凹線のなぞりを伴う隆帯によって文様が描かれる。地文はLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

5以下は罍・埋甕の検出面付近で出土した土器片である。第37・60号住居跡等の遺物が混入していることが予想されるが、参考資料として一括掲載する。

D区第67号住居跡

調査区壁際で北東コーナー一部分が検出され、南半部はガス管など埋設の攪乱によって破壊されている。第37号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。壁は残存せず、壁溝のみが検出された。炉跡・柱穴などの所在も不明で、本住居跡の規模・平面形・主軸方向など一切不明である。本住居跡に伴う遺物は出土して

いない。

D区第34号住居跡 (第458図)

E・F-18区に所在する。住居跡の推定ラインが第29・39号住居跡等と重複するが、新旧関係は不明である。

本住居跡は大小のピットが直径4mの円形の範囲に集中するものである。同種の遺構はA区において多数検出されており、削平を受けた住居跡の柱穴のみを検出したものと判断した。

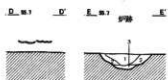
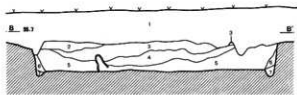
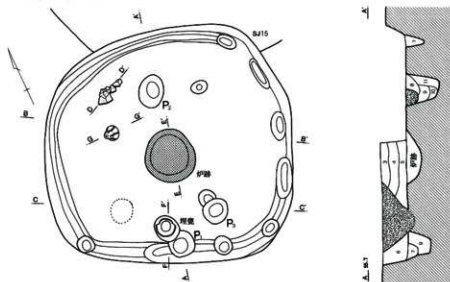
壁は全く残存せず、壁溝や炉跡等の施設も検出されなかったため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向等一切不明である。本住居跡の柱穴配置は不明である。複数の遺構が重複している可能性もある。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

D区第36号住居跡 (第459図～第462図)

D-17区に所在する。第15号住居跡を切っており、第35号土壇に切られている。不整な隅丸方形を呈し、長径3.95m、短径3.7mを測る。主軸方向は短径であ

第459図 D区第36号住居跡

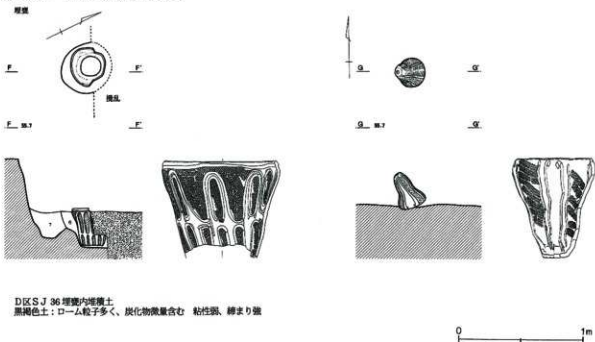


D区S.J. 36

- 1 耕作土
 - 2 極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子・焼土ブロック少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 3 極暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
 - 4 極暗褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子若干、焼土ブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 5 暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 6 暗褐色土：ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
 - 7 暗褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子少量含む 粘性あり、堅く締まっている
 - 8 暗褐色土：ローム粒子少量含む
 - 9 暗褐色土：ロームブロックやや多く、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 10 暗黄褐色土：ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
 - 11 暗黄褐色土：ローム粒子多く含む
- D区S.J. 36 炉跡
- 1 暗褐色土：ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子少量含む 締まりよし
 - 2 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量含む
 - 3 暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子多く含む

0 2m

第460図 D区第36号住居跡埋裏



D区S J 36埋裏内埋土
黒褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量含む 粘性强、締まり強

る南北寄りに存在し、N-34°-Eを指す。

壁高は残りの良い部分で42cmを測る。トレンチャーの攪乱によって覆土および床面上に部分的な破壊を被っているが、中期末葉のものとしては今回調査した中で最も残存状況の良好な住居跡である。

床面はわずかな起伏を帯びており、全体に南西方向に傾斜している。壁高は東壁では断片的にしか検出されなかったが、それ以外では床面上を1巡する。重複はみられない。

炉跡は床面ほぼ中央に位置している。不整形の地床炉で、直径33cm、深さ24cmを測る。

主軸線南端部、壁溝内側に接する位置に埋裏が検出された。胴下半部を欠いた深鉢を正位に埋設するものであるが、北半部分を東西に走る攪乱によって破壊されている。掘り方は直径約40cm、深さ31cmの円形平底のピットであったものと思われ、土器は下端を掘り方底面に着けた状態で埋設されている。なお、この埋裏は壁溝の覆土を切って埋設されている。

炉跡の北西方向50cmほどの床面上に伏せ甕を検出した。深鉢は底部穿孔されている以外は完形で、底部を西に傾けた状態で出土した。口縁の一端が床面に没入

しているがこれは土圧の影響によるものと思われ、土層断面上でも覆土形成後の土器埋設を思わせる掘り込みは検出されていない。

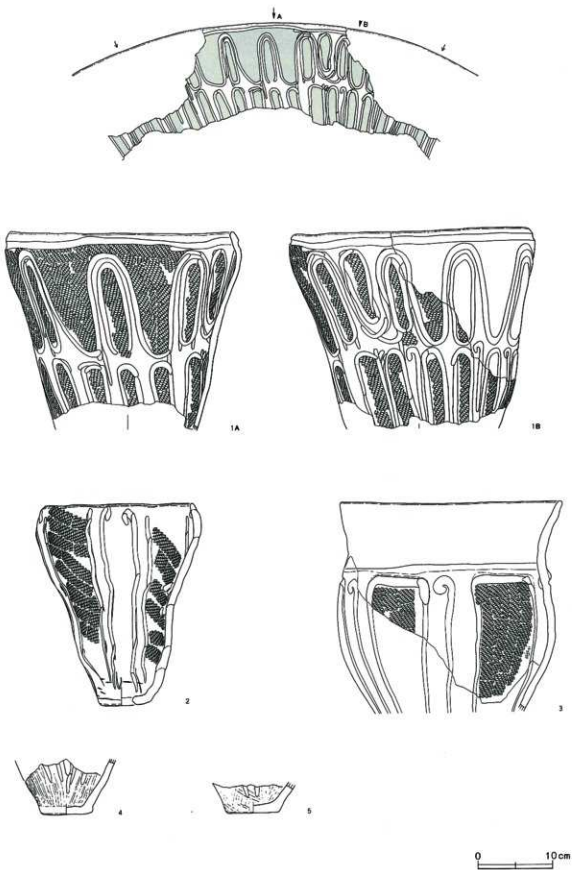
床面上からは5本のピットが検出された。これらのうち主軸線南端のP 1は出入り口施設に伴うものであろう。P 2は伊勢をはさんでP 1に対置されるもので、住居奥壁における主柱穴と考えられる。P 3は住居前面に対置される1対の主柱穴の片方であると考えられる。本来主軸線をはさんでP 3の反対側にも同規模の柱穴が存在したものと思われるが、この部分の床面はトレンチャーによる攪乱がかなり深くまで及んでおり、ピットの検出は不可能であった。

前述の埋裏・伏せ甕のほか、覆土中から多量の遺物出土した。主体となるのは縄文時代中期末葉の土器である。

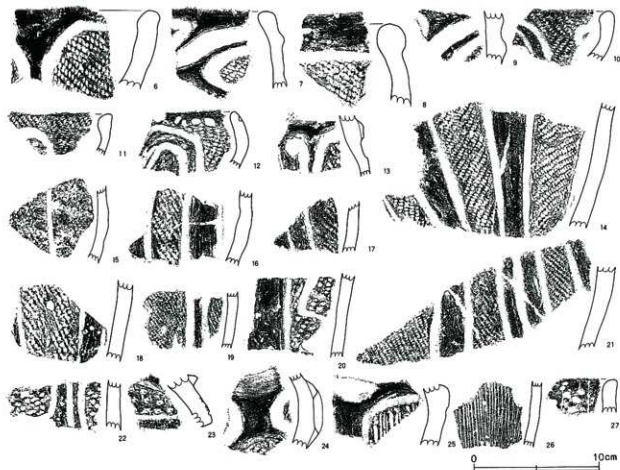
出土土器（第461図・第462図）

1は埋裏である。胴下半部および口縁から胴上半部の一部を欠失している。頸部にくびれをほとんど持たない寸胴の深鉢で、口縁部でわずかに内湾する。口縁直下に1条の沈線が巡り、胴上半部には大波状の区画が描かれ、これに楕円形の磨消しモチーフを組み合わ

第461图 D区第36号住居跡出土土器(1)



第462図 D区第36号住居跡出土土器(2)



せた玉抱き文が構成される。胴下半部には逆U字状の区画が描かれ、間隙にわらび手状の沈線が垂下する。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。口径29.6cm、現存高25.5cmを測る。

2は伏せ甕である。底部に穿孔がみられるほかは完形である。口縁直下から底部付近まで1段の懸垂文が垂下する。地文はL R単節の縄文で、右下がりに回転施文される。口径19.2cm、器高26.2cmを測る。

3は覆土下層からつぶれた状態で出土した広口壺である。頸部に1条の沈線が巡って段をなし、胴部には逆U字の区画とわらび手状の沈線が交互に配される。地文はL R単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。口径29.4cm、現存高27.8cmを測る。

4・5は深鉢底部である。懸垂文末端の沈線がみられ、縦位から斜位の研磨が施される。

6～8はキャリバー類深鉢の口縁部である。9は同

類の深鉢の口縁部文様帯の一部である。10～12は逆U字の区画が描かれる口縁部である。12の口縁には棒状工具先端の刺突列が巡る。

13は隆帯上にわらび手状の沈線が描かれ、左右に逆U字の磨消しモチーフが描かれる。3に類似の広口壺の肩部であろう。14～22は磨消し懸垂文が垂下する胴部である。20は地文部に蛇行沈線が垂下する。

23は浅鉢胴上半部である。隆帯による渦巻文等が描かれるものと思われ、地文は竹管状工具先端を用いた円形の刺突文である。24・25は両耳壺胴上半部の文様帯である。24は上下にやや圧縮された楕円形の区画がみられる。25は肩部に橋梁状把手が剥落した痕跡がみられる。

26は櫛歯状工具による条線が施文される胴下半部である。27は縦位の平行沈線が垂下する口縁部である。

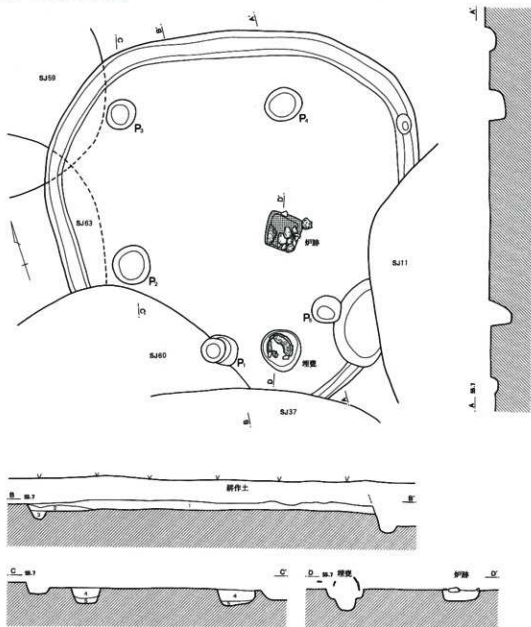
D区第38号住居跡（第463図～第468図）

C・D-18・19に所在する。第11・37・60号住居跡に切られている。第59・63号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。北に向かって開く隅丸台形の住居跡である。長径は不明、短径は6.2mを測る。壁高は約10cmを測る。壁溝は1巡し、重複はみられない。

第463図 D区第38号住居跡

炉跡は床面中央から東南東に若干ずれた地点に位置している。本来方形の石囲炉であったものと思われるが、攪乱を受けており原状を留めていない。

掘り方は一辺5.4mの隅丸方形で、深さ18cmを測る。炉跡上面には板状節理の礫片が集積しており、一部が掘り方の立ち上がりに沿って小口立ての状態になって

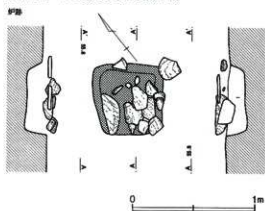


D区S J 38

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まり良し
- 2 暗褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まり良し
- 3 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性あり、締まり良し
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック少量含む
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まり良し



第464図 D区第38号住居跡伊跡



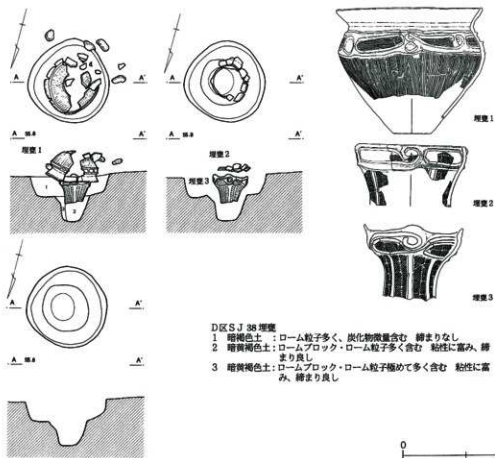
D区S J 38 伊跡

1 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む
締まり弱

いた。また、伊跡上面から第467図5に掲げた深鉢が破片の状態で出土している。

伊跡の南南西の壁溝近くで埋甕を検出した。3個体の土器を組み合わせた複合型の埋設土器である。使用された土器を、上方に位置していたものから順に埋甕

第465図 D区第38号住居跡埋甕



D区S J 38 埋甕

1 暗褐色土 : ローム粒子多く、炭化物微量含む 締まりなし
2 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性に富み、締まり良し
3 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む 粘性に富み、締まり良し

1・埋甕2・埋甕3と命名した。埋甕の構築手順は次のとおりである。

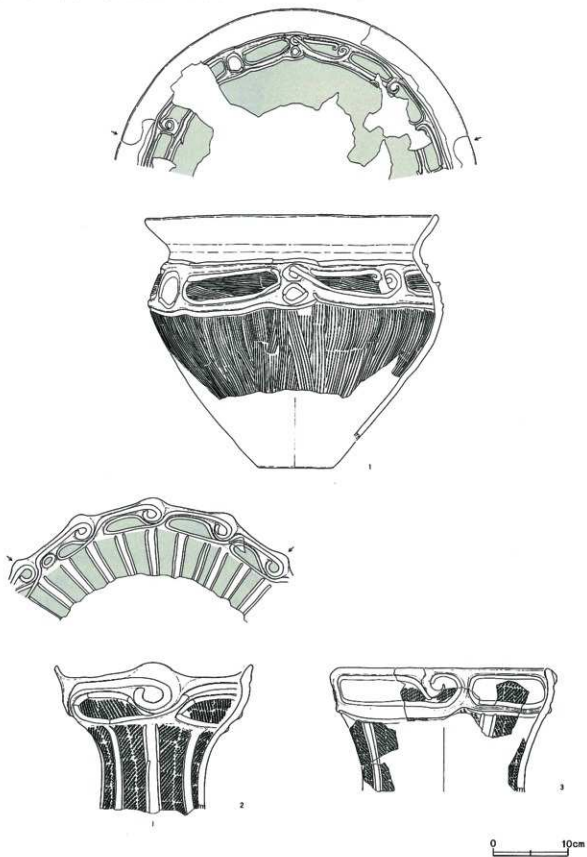
- 1 : 胴下半部を欠いた深鉢=埋甕3を正位に埋設する。
- 2 : 深鉢周囲の土を埋め戻したうえで、土器の口縁に沿って別個体の土器片=埋甕2を環状に敷き並べる。
- 3 : 完形の(底部を欠いた?)浅鉢=埋甕1を逆に被せ、周囲に礫を配置する。

埋甕の掘り方は2段の掘り方を持ち、外周のピットは直径65cm、深さ16cmの円形平底で、この底面中央部からさらに直径36cm、深さ23cmの円形のピットが掘り込まれている。

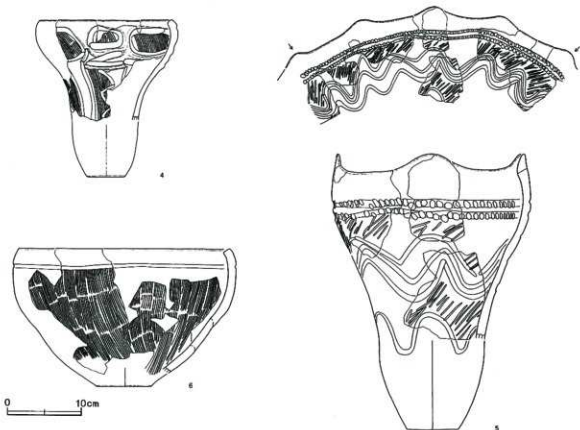
伊跡と埋甕を結ぶ線を住居の主軸と考えるなら、本住居跡の主軸方向はN-21°-Eを指す。これは壁溝の平面形が指し示す主軸と必ずしも一致していない。

床面上からは6本のピットが検出されている。

第466图 D区第38号住居跡出土土器(1)



第467図 D区第38号住居跡出土土器(2)



深さは20~30cmで、壁溝に沿ってやや不規則に並んでいる。

遺物は前述の埋壘の他に縄文時代中期後葉を中心とした土器が出土している。

出土土器(第466図~第468図)

1は埋壘1である。胴上半部に文様帯を持つ浅鉢で、胴下半部を欠失する。頸部にくの字のくびれを持ち、口縁は無文で直線的に開く。胴上半部の文様帯はキャリバー類深鉢の口縁部に由来するもので、隆帯+沈線によって渦巻文や楕円形の区画を描くもので、1と同様、文様帯の下端は隆帯で明瞭に区画される。胴部には幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。地文はL R単節とL R L複節の2種類の縄文が部位によって使い分けられている。

2は埋壘3である。キャリバー類深鉢で、胴下半部を欠失する。4単位の波状口縁をなし、外湾する胴部と内湾する口縁部との間に段を構成する。口縁部文様帯は隆帯と幅広の沈線によって入り組み状の渦巻文

チーフを描くものである。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はR L R複節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位回転に施文される。口径31cm、現存高28.7cmを測る。

3は埋壘2である。キャリバー類深鉢の口縁部と胴上半部で、2~3つの部分に分かれて出土している。水平口縁であり、口縁部文様帯は隆帯+沈線により渦巻文と楕円形の区画を描くもので、1と同様、文様帯の下端は隆帯で明瞭に区画される。胴部には幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。地文はL R単節とL R L複節の2種類の縄文が部位によって使い分けられている。

4はキャリバー類の小型深鉢である。口縁部から胴部中段にかけて残存する。口縁部文様帯は隆帯+沈線による楕円形の区画が横位に連続するものである。胴部には磨消し懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文が交互に配される。地文は楕歯状工具の条線で、全て縦位に施文される。口径17.4cm、現存高13.3cmを測る。

5は埴輪上面から出土した深鉢である。4単位の波状口縁で、胴部中段にくびれを持ち口縁部は内湾する。全体の造作はキャリパー類の深鉢であるが、本資料はこれに磨消し連弧文系の文様が描かれる。

口縁下に幅広い無文帯を持ち、胴部との境に篋状工具先端の刺突を伴う2条の沈線が巡る。胴部には三本沈線の弧状モチーフが2段に施文される。地文は棒状工具による斜位の集合沈線で、モチーフに沿って充填施文される。

6は浅鉢である。口縁部から胴下半部にかけて残存する。水平口縁で、胴部から口縁にかけて緩やかに内湾するボウル形の器形である。

口縁下に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。

7・8はキャリパー類深鉢の口縁部である。7は波状口縁で、内面に断面三角形の隆帯が巡り、稜を形成する。8は水平口縁である。

9は口縁下に1条の沈線が巡り、胴上半部に楕円形の磨消しモチーフが描かれる。10は口縁直下に幅広い

沈線が巡る。胴部には粗雑な縄文のみが施文される。11は無文の口縁部である。

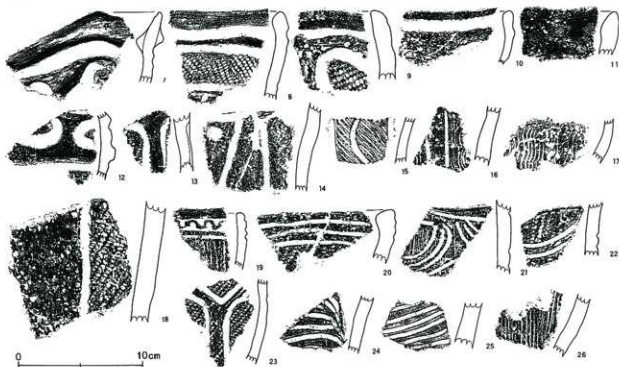
12は隆帯+沈線による楕円形の区画が横位に連続するもので、キャリパー類深鉢の口縁部文様帯か、両耳壺の胴上半部である。13もほぼ同じ部位の破片であろう。

14は磨消し懸垂文が垂下する胴部で、口縁部文様帯下端の沈線がみられる。15・18は磨消し懸垂文が垂下する破片である。16・17は櫛歯状工具による波状の条線が垂下する胴部である。16は磨消し懸垂文が垂下する。17は浅鉢か、両耳壺の胴下半部と思われる。

19~23は連弧文系の土器である。19は交互刺突を伴う平行沈線が巡る口縁部で、縦位の燃糸文が施文される。20は口縁下に三本沈線の区画が巡る。21・22は三本沈線の連弧文が描かれる。23は平行沈線の鋸歯状文の下端から懸垂文が垂下する。

24・25は棒状工具の集合沈線を地文とする胴部である。26は櫛歯状工具による縦位の集合沈線を施文する胴部である。

第468図 D区第38号住居跡出土土器(3)



D区第40号住居跡（第469図・第470図）

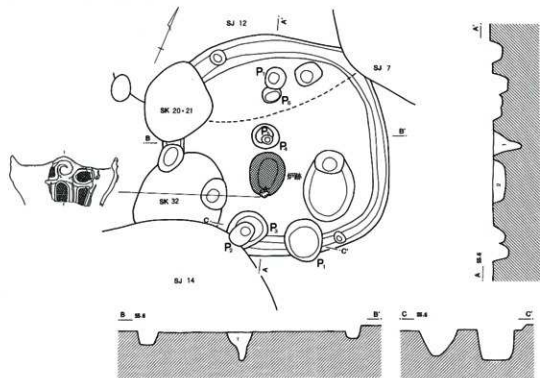
D-18区に所在する。第7・14号住居跡、第20・21号土壌に切られる。第12号住居跡、第32号土壌とも重複するが、新旧関係は不明である。

長径3.7m、短径3.5mの楕円から隅丸方形の住居跡である。主軸線は短径方向に存在し、N-22°-Wを指す。壁高は残りの良い東壁部分では11cmを測るが、それ以外の部分では壁・覆土ともほとんど残存していない。壁溝は1巡し、重複はみられない。床面は平坦で、南西に向かって緩やかに傾斜している。

炉跡は主軸線上で、床面中央よりもやや南東寄りに位置している。長楕円形の地床炉である。長径68cm、短径55cm、深さ19cmを測る。覆土中における焼土の堆積は微弱だが、底面に被熱の痕跡が認められた。

床面上および壁溝中に11本のピットが検出された。注目される配置としては、住居跡南端の壁溝に掛かる状態で主軸をはさんで1対のピットP1・P2が対置されており、一方炉跡をはさんで奥壁寄りの主軸線上

第469図 D区第40号住居跡



D区SJ 40

- 1 暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし

に重複するものを含む4本のピットP4~7が並ぶ。

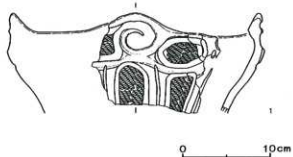
P1・P2・P4(5)は深さ40~45cmを測る。ピットどうしの間隔が狭すぎるくらいはあるが、これらが本住居跡の主柱穴であり、3本柱を構成するものと思われる。P5はP4の柱痕に相当するものであろう。床面上からは他にも3本のピットが検出されているが、掘り込みは比較的浅く、配置にも規則性がみられない。

本住居跡は遺構検出段階で覆土がほとんど残されていなかったため、確実に共存する遺物はほとんど出土していない。唯一、炉跡の検出面において深鉢の口縁部破片が出土している。遺物の時期は縄文時代中期後半ないし末葉で、住居形態のうえでは後者の可能性が高い。

出土土器（第470図）

1は炉跡検出面から出土したもので、キャリバー類の深鉢口縁部である。口縁部文様帯は、波状口縁の波頂部に沈線のなぞりを伴う隆帯により渦巻文が描かれる。左右には、やはり隆帯+沈線による楕円形の区画

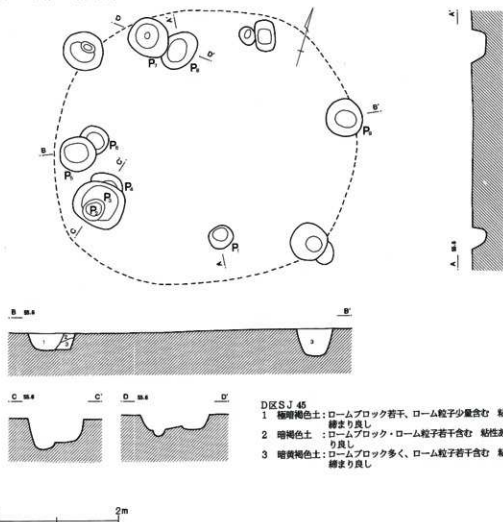
第470図 D区第40号住居跡出土土器



が連続して描かれ、隆帯上に棒状工具先端による円形の刺突文が施される。

胴部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。モチーフ間の無文部には縦位の沈線が垂下して、三本沈線の磨消し懸垂文を構成する。地文はLR単節の縄文で、部位を問わず縦位回転で施文される。

第471図 D区第45号住居跡



D区第45号住居跡 (第471図)

F-17区に所在する。第27・30・44号住居跡、第34号土壌等と重複するが、新旧関係は不明である。

大小のピットが長径4.8m、短径4.2mの楕円形の範囲に集中するものである。壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。伊跡その他の施設も発見されなかったため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向は不明である。

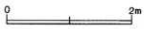
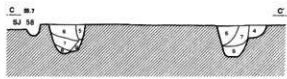
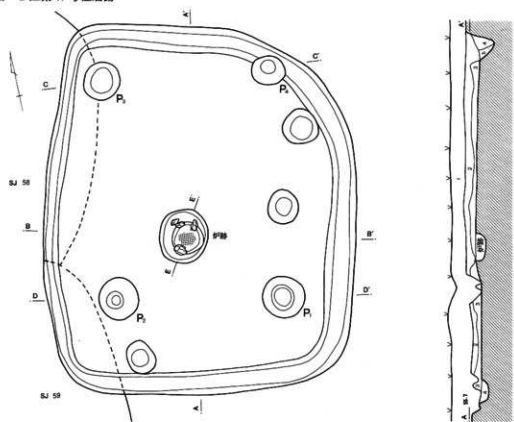
ピットは1～3本が組になって住居跡推定線上を巡っており、壁柱穴を構成するもののように思われる。北から西壁相当部分では比較的密に分布しているが、南壁に相当する部分では空白が目立っている。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

DESSJ 45

- 1 極暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗黄褐色土：ロームブロック多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし

第472図 D区第47号住居跡



D区S.J.47

- 1 新作土
- 2 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子やや多く、焼土ブロック少量含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗黄褐色土：埋め戻しローム 黒色土少量含む 粘性あり、締まりよし
- 5 黄褐色土：埋め戻しローム 粘性あり、締まりよし
- 6 暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 7 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む粘性あり、締まりよし
- 8 明褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりよし
- 9 極暗褐色土：ロームブロック多く含む 粘性あり、締まりよし

D区S.J.47伊跡

- 1 極暗褐色土：焼土ブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりあり
- 2 極暗褐色土：焼土ブロックやや多く、ローム粒子・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 3 褐色土：ローム粒子多量、焼土粒子微量含む 粘性あり、締まりあり
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック多量含む 粘性あり、締まりよし

第473図 D区第47号住居跡出土土器(1)



D区第47号住居跡(第472図～第474図)

C・D-19区に所在する。第58・59号住居跡を切っている。第9号住居跡とも切りあっている可能性があるが、新旧関係は不明である。

不整な隅丸長方形の住居跡で、長径5.8m、短径5mを測る。主軸方向はN-12°-Eを指す。壁高は残りの良い部分で22cmを測る。壁溝は1巡し重複はみられない。床面は平坦で全体に西へと傾斜し、また炉跡南側で1段低くなっている。

炉跡は主軸線上南寄りに位置している。不整形の地床炉で、覆土中に数点の礫を伴っており、本来炉石を持っていた可能性もある。直径85cm、深さ22cmを測る。

炉床面は中央を台状に掘り残しており、過去、炉石や炉土器が存在した可能性を伺わせる。被熱や焼土の堆積はこの台状部の中央で顕著であり、壁際の落ち込み内部では焼土はほとんど確認されない。

支柱穴らしきピットは住居跡プランの各コーナー付近に1本づつ配されている。南東コーナーのP1は床面下20cmとごく浅い掘り込みであるが、他の3本は深さ45～52cmを測る。

上記の4本以外にも数本のピットが存在するが、特に他の住居跡と切りあう西側壁溝付近ではピットの検出が困難になっており、本住居跡全体の柱穴配置は不明である。

遺物は中期後葉から末葉の土器が出土している。

出土土器(第473図・第474図)

1は深鉢胴部である。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁部に向けて強く外反する。Y字状の磨消し懸垂文が垂下し、無文部にわらび手状の沈線が描かれる。地

文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。復元最大径23.8cm、現存高16.2cmを測る。

2は小型の深鉢口縁部である。曾利系の隆帯文土器で、頸部がくの字にくびれ口縁部が強く張り出す。

棒状工具の刻みを伴う隆帯が頸部に巡り、ここを起点として胴部に同様の隆帯が間隔をおいて垂下する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。口径13cm、現存高12.2cmを測る。

3は深鉢底部である。懸垂文末端の沈線が観察される。地文はみられず、篋状工具による斜め方向の研磨が施される。底径5.8cm、現存高3.4cmを測る。

4・5はキャリバー類の深鉢口縁部である。4は二本隆帯の入り組み文が描かれる古相のキャリバー類、5は両側に沈線のなぞりを伴った隆帯により波状のモチーフが描かれる。7は文様帯下端を区画する隆帯で、やはりキャリバー類深鉢に付随するものであろう。

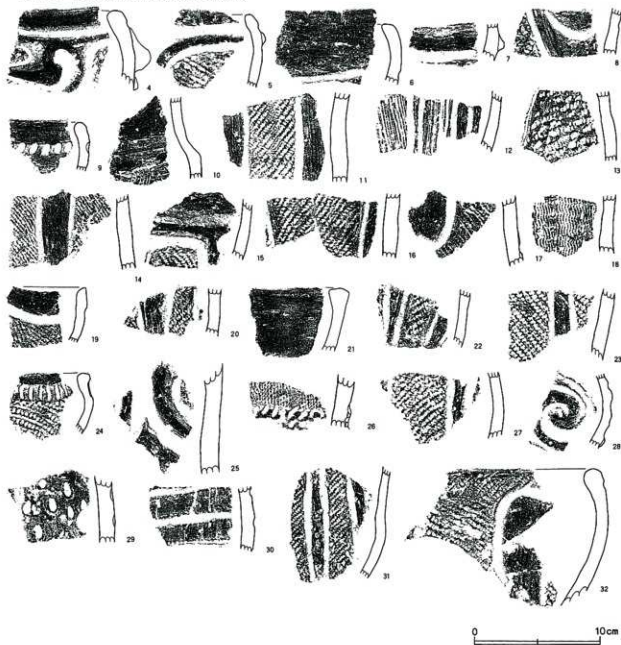
6は無文の口縁部で、胴部との境を1条の沈線で区画する。浅鉢の口縁部であろう。19も口縁下に1条の沈線が巡り、胴部にはLR単節の縄文が施文される。波状口縁の深鉢であろう。

9・24は口縁下に結節沈線風の列点文が巡る口縁部である。24は太さの異なるL1段の縄を撚り合わせたRL単節の縄文が施文される。32は波状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。

15は1段懸垂文の深鉢頸部であろう。口縁下に断面三角形の隆帯が巡り、胴部にも同様の隆帯が間隔をおいて垂下する。21は無文の口縁部で、口唇肥厚し、口端上は平坦に整形される。

25は平行沈線による横楕円形の区画が描かれるもので、形骸化した口縁部文様帯であろう。

第474図 D区第47号住居跡出土土器(2)



8はY字状の磨消し懸垂文が描かれる胴部で、吉井城山類に属するものであろう。17は曲線的な磨消しモチーフの末端がひれ状に隆起するもので、時期が後期初頭に入る可能性がある。

10は両耳壺ないし広口壺の肩部である。頸部は無文で肩部に段を持ち、胴部には櫛歯状工具による波状の条線が垂下する。

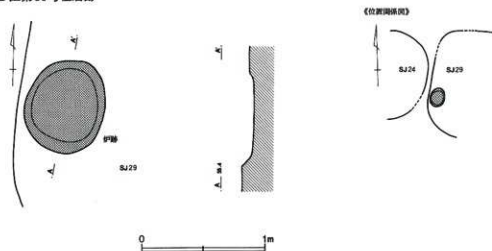
26は曾利系の経帯文土器の頸部である。棒状工具に

よる斜位の刻みを伴う経帯が頸部に巡り、これを起点に胴部にも同様の経帯が垂下する。地文は縦位の燃糸文である。29は曾利系の深鉢胴部で、縦位の平行沈線間に雨垂れ状の列点文が施文される。

28は無文地に渦巻状の沈線文が描かれるもので、曾利系の深鉢口縁部であろう。30は横位の平行沈線が巡るものである。

18は櫛歯状工具による小波状の条線が垂下する。

第475図 D区第50号住居跡



第476図 D区第50号住居跡出土土器



D区第50号住居跡 (第475図・第476図)

E-17区に所在する。第29号住居跡壁溝を切っている。同住居跡の壁溝上に炉跡だけを検出した。不整形円形の地床炉で、長径73cm、短径62cm、深さ8cmを測る。

遺物は炉跡覆土中から縄文時代中期後葉から末葉の土器が少量出土している。

出土土器 (第476図)

1は板状の突起である。口唇肥厚して、口端上にわらび手状の沈線が描かれる。正面中央部に貫通孔を有し、周囲に1条の沈線が巡る。2は地文縄文上に渦巻文が描かれる。

3は磨消し懸垂文の胴部である。4は櫛歯状工具による縦位の条線が施文される胴部である。5は無文の口縁で、頸部にくの字のくびれを持つ。浅鉢か両耳壺に伴うものであろう。

D区第52号住居跡 (第477図)

D-17区に所在する。第13・49号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。大小のピットが直径5mの円形の範囲に集中するものである。壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。炉跡等の施設も発見されなかったため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は一切不明である。ピットは住居跡推定ライン上に環状に巡り、壁柱穴を構成するものと思われるが、複数の遺構が重複している可能性もある。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

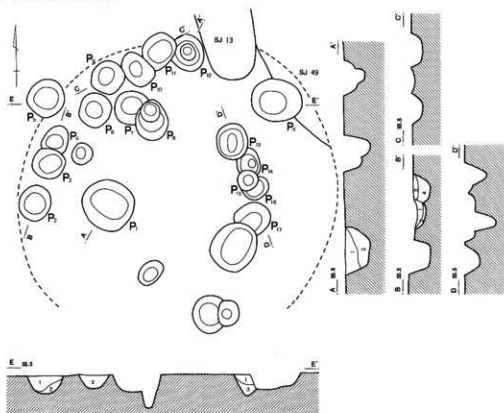
D区第53・54号住居跡 (第478図)

G-17区に所在する。調査区南東隅の一角で2軒重複した状態で検出した。新旧関係は不明である。

D区第53号住居跡

南半部分が調査区域外に存在する。南北に主軸を持つ楕円形の住居跡と思われ、長径は不明、短径は3.7mを測る。壁は全く残存せず、壁溝のみが検出された。炉跡は検出されなかった。遺物は出土していない。

第477図 D区第52号住居跡



D区S.J.52

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし

0 2m

D区第54号住居跡

大半が調査区域外に存在する。壁は全く残存せず、壁溝の一部が検出された。本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は不明である。伊跡は検出されなかった。遺物は出土していない。

D区第55号住居跡 (第479図～第481図)

C-17区に所在する。ガス管等埋設の攪乱際で、伊跡と埋壘だけが検出された。壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。従って、本住居跡の規模・平面形は不明である。伊跡と埋壘を結ぶ線はN-54°-Wを指し、これが本住居跡の主軸方向に比定される。

伊跡は楕円形の地床伊である。長径1.06m、短径92cm、深さ25cmを測る。伊跡の南東で2基の埋壘を検出

した。これらを伊跡に近いものから順に埋壘1・埋壘2と命名した。

埋壘1は深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は直径88cm、深さ55cmを測る。土器は掘り方底面から12cm浮いた状態で埋設されていた。

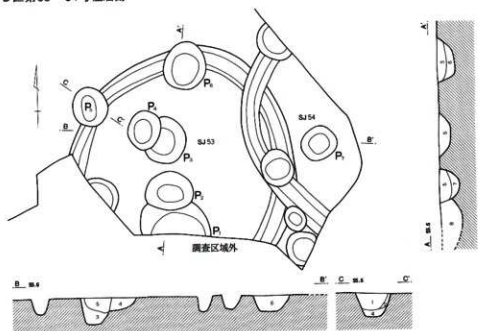
埋壘2は大部分を攪乱に切られており、深鉢胴中段の一部をかううじて復元した。掘り方は直径52cm、深さ34cmのビットで、土器は破壊され、破片の状態でのビット検出面に散乱していた。

前述の埋壘に混じって、縄文時代中期末葉の土器片数点が出土している。

出土土器 (第480図・第481図)

1は埋壘1である。調査段階では底部までが残存し

第478図 D区第53・54号住居跡

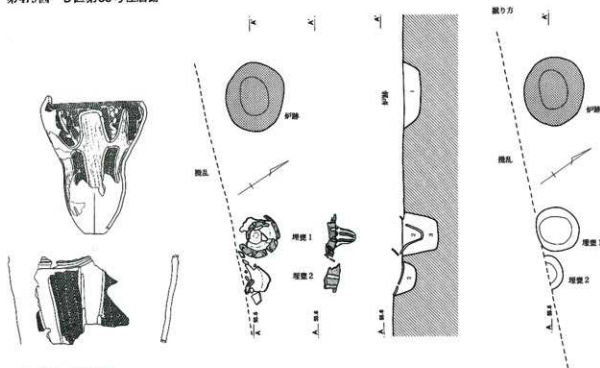


D区S J 53・54

- | | |
|---|---|
| <p>1 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む</p> <p>3 暗褐色土：1層に似るが暗色</p> <p>4 暗褐色土：ロームブロック若干含む 粘性あり、締まりあり</p> <p>5 黒褐色土：ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりよし</p> | <p>6 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む</p> <p>7 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりなし</p> <p>8 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりなし</p> |
|---|---|

0 2m

第479図 D区第55号住居跡

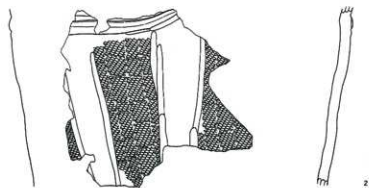
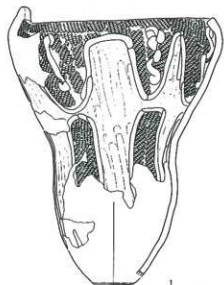
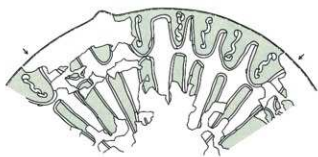


D区S J 55 住居跡・埋塞

- | |
|--|
| <p>1 暗赤褐色土：焼土粒子・ローム粒子多量、炭化物微量含む 堅く締まっている</p> <p>2 暗褐色土：ローム粒子微量含む 粘性強、締まり強</p> <p>3 暗褐色土：埋塞埋設に伴う埋め戻し ロームブロック・ローム粒子微量含む 粘性強、締まり弱</p> |
|--|

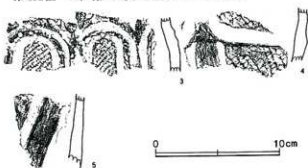
0 1m

第480图 D区第55号住居跡出土土器(1)



0 10cm

第481図 D区第55号住居跡出土土器(2)



ていたが一部器壁が脆くなっており、辛うじて口縁から胴下半部までが復元された。水平口縁で1カ所に突起を有する。胴上半部には大波状の区画が描かれ、口縁との間には縄文が施文され、わらび手状の沈線が描かれる。胴下半部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。

地文はRL単節の縄文が充填施文される。口径25.6 cm、器高33.6 cmを測る。

2は埋甕2である。キャリバー類深鉢の頸部から胴部中段までが残存する。口縁部文様帯の下端が隆帯によって区画され、胴部に幅広い磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

3は深鉢胴下半部である。平行沈線による逆U字の磨消しモチーフが描かれる。

4はキャリバー類深鉢の頸部である。5は磨消し懸垂文の胴部である。

D区第58号住居跡(第482図・第483図)

C-19区に所在する。西半部が調査区域外に存在する。第47・59号住居跡に切られる。

北東-南西に主軸を持つ楕円形の住居跡であると思われ、長径約5.2 mと推定される。壁高は14 cmを測る。壁溝は1巡し、重複はみられない。

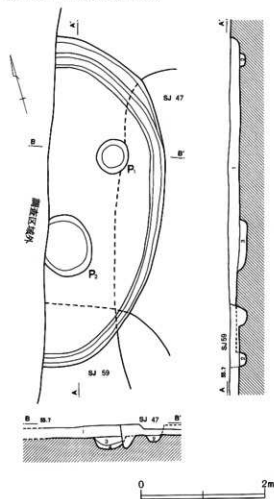
床面は平坦で、わずかに北へ傾斜している。炉跡は検出されなかった。

覆土中から縄文時代中期後葉から末葉の土器が少量出土した。

出土土器(第483図)

1~6はキャリバー類の深鉢である。1は口縁部、2・3は頸部で、口縁部文様帯下端を沈線により区画

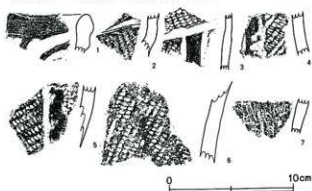
第482図 D区第58号住居跡



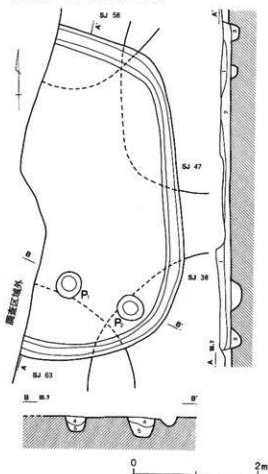
D区 S J 58

- 1 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 粘性強、締まり良好
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 3 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 粘性なし、締まり強
- 4 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性強、締まり強

第483図 D区第58号住居跡出土土器



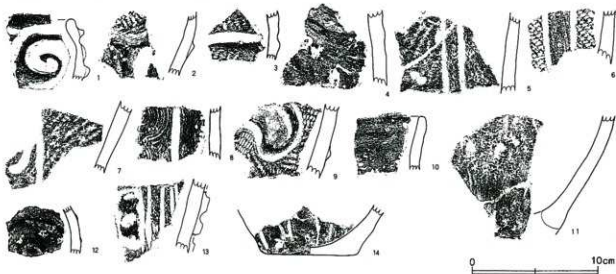
第484図 D区第59号住居跡



D区S.J. 59

- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量、炭化物微量含む 粘性弱
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 粘性強、締まり強
- 3 暗黄褐色土 : ローム粒子多量含む
- 4 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 粘性なし、締まり強
- 5 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子や多く含む粘性弱、締まり強

第485図 D区第59号住居跡出土土器



する。4～6は磨消し懸垂文の胴部である。

7は櫛歯状工具の条線が施文される胴部である。

D区第59号住居跡 (第484図・第485図)

C-18・19区に所在する。西半部が調査区域外に存在する。第58号住居跡を切っており、第47住居跡に切られる。第38・63号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

北東-南西に主軸を持つ不整形円形の住居跡であると思われ、長径約5.2mと推定される。壁高は17cmを測る。

壁溝は1巡し、重複はみられない。

床面は平坦で、中央部が若干高い。勾配は検出されなかった。

覆土中から縄文時代中期後葉から末葉の土器が少量出土した。

出土土器 (第485図)

1～8はキャリバー類の深鉢である。1は口縁部、2～4は頸部で、口縁部文様帯下端を断面三角形の隆帯で区画する。

5～8は磨消し懸垂文の胴部である。

9は微隆起線による渦巻文である。10は両耳壺の口縁部であろう。

11は無文の胴下半部、12はひさご形土器の胴部であろう。13は曾利系の隆帯文土器である。14は深鉢の底部である。